◀書　評▶

総編集　山田　英智（九大教授）・内藤　耕二（東大教授）・渡辺陽之輔（慶大助教授）

## 「電子顕微鏡による細胞組織図譜」

広大病理学教室　飯　島　宗　一

医学書院刊行の電子顕微鏡による細胞組織図譜第1巻が発刊された．総編集は山田英智，内藤耕二，渡辺陽之輔の三氏で解剖学，生理学及び病理学の視野の投影が企てられていると考えられるが，全6巻のうち差し当ってこの第1巻は，山田英智，山元寅男，渡辺陽之輔三氏の編集によって総論，循環器，血液及び造血器にあてられている．本の体裁からいうとA4の大型版で，総アート207頁，右側全頁を写真にあて，左側に解説を附してあって，この種のアトラスとしてはもっともゆきとどいた形である．電子顕微鏡写真の原因の選択もまたその印刷も目下の技術では最高に近い仕上りであって，何よりもまず存分に電子顕微鏡写真を楽しむことができる．それはこの本が，いわば当代の日本のもっともすぐれた電子顕微鏡学者の作品の収集である故当然のことではあるが，読者にとってまことにありがたいことである．

ところで，この第1巻の内容に立入って通読してみると，1種の“スタンダードのテキスト”としていろいろなことを教えられるほかに，私はまたいろいろのことを考えさせられた．そのひとつは，当然のことながら，総論として記述されている細胞についての記載がもっとも系統的なまとまりを備えているという感想であるが，そのことは反面，たとえば心臓，血管とか，血液，造血器とかいう器官または組織レベルの電子顕微鏡的とりあつかいのむずかしさを改めて思い知らされたということである．勿論，電子顕微鏡の技術は極めて新しいものであり，征服すべくしてのこされている対象は無限にのこされているのであるから，ある限られたスペースで，問題のすべてを表現することはできない．また主題を選択するにしても，実際いいオリジナルな写真のあらかじめの貯えがなければ，アトラスの形にととのえることはできない．その制約は目下の段階では所詮まぬがれることのできぬものである．それにしても，われわれは，何を見たいと思い，何を知りたいと思い，また何を表現したいと思って電子顕微鏡をつかうのであるか．電子顕微鏡が高度の可能性と尖鏡度をもつ一面，極めて狭い，focus のしぼられた検索手段であるだけに，“スタンダード”と“基礎”の提供ということのむずかしさは，編集者の当然悩まなければならない課題である．

おそらく，医学及び生物学の中における電子顕微鏡の利用のための視野は，未分化の時代をようやく経過して，多元的に分化しつつあると言うことができるであろう．この視野の多元化は無論それぞれの必然性をになって果されなくてはならないし，電子顕微鏡領域の多元的分化を各々の電子顕微鏡学者が互に正当に評価し合うこともまた現状では大切である．このアトラスは，したがって，好むと好まざるにかかわらず，ある程度までこの多元化を反映しないわけにはいかぬであろうから，それが今後続刊される各巻において，どのように表現されていくかは，非常な楽しみでもあり，また注視を要する点である．この小文のはじめに，総編集者の名前をかかげて，解剖学者と，生理学者と，病理学者が存在しているということを注意したのは，そのためである．

以上のように，いずれにしてもこの図譜はいろいろな意味で楽しみと問題の多いシリーズである．そして，すぐれた水準の図譜である．すべて，生物の構造と機能のからみ合いに関心を持つ人々の資を投じて，悔いることのない本だといえるであろう．のみならず，これは今までの日本の電子顕微鏡的研究のひとつの集約であり，同時にまた近い将来へのひとつの足がかりを提供すると考えられる仕事であって，皆が真面目に批判しなくてはならない素材になるものであろうと思われる．

全6巻・A4判／各巻予価
¥6,000～8,000
全巻揃概算　¥40,000
隔月刊行・昭和42年12月全巻完結予定

医学書院刊



©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012

2026/11/11 09:10:50